

[原著論文]

## 乳房喪失者の語りに見る「乳房喪失」の意味 —そのライフストーリーに見られる重層的構造—

内田伸樹

キーワード：乳房喪失, 意味, ライフストーリー, 重層的構造, 自己像

### The Meaning of "Loss of Breast" in Narratives by Individuals Who Had Undergone Mastectomy — Multi-Layered Structure in Life-stories —

Nobuki UCHIDA, R.N., M.A.S., B.S.N,

#### Abstract

This study categorized the meaning of "loss of breast" as constructed from the narratives of individuals who had undergone mastectomy. Participants were women beginning their first course of chemotherapy after mastectomy. The researcher collected data using formal and informal interviews and conducted a qualitative analysis, focusing on the meaning of "loss of breast." Five categories of meaning emerged: "negative change of self," "transient pain," "challenge," "new quality" and "exploration into self." These categories turned out to be related to the participants' representation of themselves and their environment, which had developed in their life-stories in the above order over time. These categories were used even when participants explained their self-presentation, and constituted a structure that involved a multiple self-scheme. As a result, meaning of "loss of breast" appears to become increasingly multi-layered as these women adapt to their postoperative condition.

Key word : loss of breast, meaning, life-story, multi-layered structure, self-scheme

#### 要旨

本論文は乳房切除術を経験した女性の語りの分析を通して、乳房喪失という経験を主体がいかに意味付けするかを明らかにすることを目的とした。対象者は術後一度退院し、初めての化学療法を目的として入院してきた女性である。フォーマル、インフォーマルなインタビューによって得られた対象者の語りをデータとして質的帰納的に分析し、乳房喪失の「意味」に焦点を絞り考察を行った。乳房喪失の意味は「自己の否定的変化」「一時的苦痛」「立ち向かう対象」「新しい属性」「自己を再吟味する対象」と変化し、それぞれ語り手にとっての自己や周囲世界の見え方と関連し

ていた。また、カテゴリーは時間軸に沿ってほぼこの順序で全対象者に現れた。しかし、すべてのカテゴリーは現時点での状態を語る際にも現れ、時間を経るにつれて複数のカテゴリーが共時的に統合されたものとなっていた。乳房喪失の意味は対象者にとっての多様な意味世界、自己像の変化を反映して重層化し、術後の新しい状況への適応が進むと考えられる。

#### I はじめに

乳房切除術の結果としての乳房喪失は、危機モデルによる分析の対象であり研究の多くはネガティブなボディイ

メージに関するものが大半を占めている。一方、健康レベルの経過の面では、周手術期やエンドステージといった変化に富んだ期間については心理的・身体的共に多数研究されている。しかし本邦では、慢性期に至っては、量的に分析された研究<sup>1)2)</sup>はあるが、どのような個別世界を対象が生きているかという点については、ほとんど研究されていない。加えて最近では、乳がん女性による闘病手記がいくつも出版されているのだが、当事者のライフストーリー<sup>3)</sup>から何を読み取る事ができるのかが十分分析検討されているとは言い難いのが現状である。周手術期を脱出し、慢性期にある乳房喪失者の人々に対して適切な援助を提供し、彼女らとともに生活していくには、主観的世界観に立ったニーズを知っておく必要があると考えた。

そこで本研究は、対象者の体験する「乳房喪失」の多様性を記述し、「乳房喪失」が対象者にとってどのような意味を持つのかを整理する。ついで、見いだされた複数の意味の間に見られる関連性を検討し、対象者の体験する現実を理解するためのモデルの構成を試みた。

## II 方法

研究対象者：総合病院の一般外科病棟で、乳房切除術のち退院し、その後化学療法導入の目的で入院してきた女性6名とした。インタビューには、対象者の家族を含めた重要他者が同席を希望した場合は彼・彼女らのインタビューも逐語録に含めた。40代4名、50代1名、60代1名であった。(表1)

面接期間：平成14年1月～12月

倫理的配慮：入院時に研究の趣旨について十分に説明し、対象者および重要他者とのインタビュー記録やカルテ記録内容を研究目的に使用すること、および、インタビューの一部は録音をすることを口頭と書面で説明し、「研究協力の同意書」への自署をもって承諾を得た。その際、研究協力に関する本人の意思決定は、協力の途中中止の選択を含めて常に保障されること、データの破棄を含めた取扱いとプライバシー保持には細心の注意を払い、倫理的に配慮する事を口頭と紙面の両方で確約した。

対象との関わり：対象者入院中はプライマリーナースと

して勤務した。また、対象者への最初の挨拶では「患者さんの身体の有り様に関する思いやその変化に対し関心を持つ看護師」と自己紹介した。

語りのデータ収集：McAdams<sup>4)</sup>のライフストーリー・インタビューを参考に半構成的インタビューを準備した。①これまでの人生の区分とその理由、②①の各区分で印象的な出来事、③①の各区分で重要な人物、④現在直面している課題、⑤将来の展望、といった5つの領域についての質問を切り口に話をしてもらった。入院中・退院後(通院時)ともに病棟の面談室でインタビューを実施したフォーマルなインタビューに加えて、入院中はベッドサイドで日常的に交わされるインフォーマルインタビューも分析対象とした。インタビューは退院後3ヶ月までの期間おこなった。インタビュー内容は終了後にすぐにフィールドノートにまとめ、録音したものは逐語録に起こし観察記録とともにフィールドノートにまとめた。

データの分析：分析は、エスノグラフィの分析法<sup>5)</sup>を参考にして独自に作成した方法により行った。①データを何度も読み返しなが、意味文節ごとに内容に即したコード名をつけた。②コード分析を行い、類似なものをまとめて意味を忠実に端的に表現する言葉を選択し概念とした。③②の内「乳房喪失の意味」に関連する概念に分析の焦点を絞った。④概念間の関連性に基づいて、能智<sup>6)</sup>を参考にカテゴリーを作成した。⑤カテゴリー間の関係性を図式化し現実を説明できるモデルを構成した。

さらに、分析結果の信憑性・信用性を高めるため、分析結果は対象者および対象者の家族を含めた重要他者にフィードバックを毎回実施した。彼女らの感想およびコメントは分析結果を修正するために使用した。

## III 結果

### —「乳房喪失」の意味のカテゴリー—

「乳房喪失」の意味あいは文脈によって違っていたが、意味のカテゴリーは大きく5つ認められた。以下、乳房喪失の意味カテゴリーを【 】で表記する。

- a) 【自己の否定的変化】
- b) 【一時的苦痛】

(表1 対象者)

対象者	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	F氏
年齢	42歳	45歳	48歳	65歳	48歳	55歳
フォーマルインタビュー回数・入院中	8	6	6	6	7	7
フォーマルインタビュー回数・退院後	3	3	3	4	3	3
既婚・未婚	既婚	未婚	未婚	既婚	既婚	既婚
重要な人物	夫・娘	母親	特になし	夫	息子	息子・娘

c) 【立ち向かう対象】

d) 【新しい属性】

e) 【自己を再吟味する対象】

と命名することができた。以下、各カテゴリーについて説明する。また発言例を太字ゴシック体で表記し、対象者を明示した。

a) 【自己の否定的変化】：乳がんと疑われたその場を基点として語られていた。自分がガンではないかと疑う、あるいは診断される前とは異なり、自己価値が低下した状態になったことを示し、落ち込みや、不安を伴っていた。自分や家族・社会が期待する女性としての行動を取る事ができないというエピソードを語る時に多かった。

[A氏] やっぱり、全摘だって言われたときによ、夫には悪いことしたなって思ったのよ。おっぱい取ったら、女としては見れないだろうなって。

術後月日が過ぎれば過ぎるほど、このカテゴリーに直接的に関係付けるような語句は少なくなった。しかし、乳房を直接見せることのある夫や子どもといった家族との関わりを語る際には、術後2ヶ月経った対象者からも聞かれた。術後数ヶ月経過しても乳房喪失という状態は、「自己の否定的変化」の象徴となっていた。

[B氏] 退院して、いっしょにお風呂に入ったときね、息子がこうじーっと見てるんですよ。先に、言うてはいたけど。息子がじーっと見てる間、私も考えてるんですよ。どう反応したらいいかわからないし。

[E氏] 最近、ニューハーフの番組増えてるでしょう？あれみると、やっぱり、胸があって女なんだなあって思えます。

b) 【一時的苦痛】：術直後から手術3・4日目くらいまでの入院中の語りに多い。病人・患者としての自己像の象徴となっている。一時的には後退し中断しているが、今後は徐々に身体の状態が戻っていくのだという希望を含んでいた。

[D氏] いやあ、腰がつかった。お乳もうないのかなあって考えられたのは朝方。それまでは、腰の痛みとの戦いだった。つぎは管との戦い。

[F氏] 胸が鉄板みたいになるって聞いていたけど、辛いねホントに。重くて、硬くて…命と引き換えにこんな辛い思いをしなきゃいけないの？手術終わったのに…って、

一方で、退院後にも続く創部痛、抗癌剤治療などの症状の語りに現れることもある。常にそれらの症状に縛られて

いる訳ではないが、ふとした拍子に苦痛を感じている。乳房喪失の延長線上に創部痛や抗癌剤治療による症状をとらえている。

[F氏] 抗がん剤はね、こころの持ち様だと思うのよ。この薬に全身の細胞がやられる、自分が食べられるって思えば、食欲はなくなるし、つらいよね。

c) 【立ち向かう対象】：告知後時間が経過し、乳房喪失を予期的・現実的に認識するとともに、乳房喪失という現実により積極的な態度が見られ始めてくる。

[F氏] 抗がん剤はね、こころの持ち様だと思うのよ。この薬に全身の細胞がやられる、自分が食べられるって思えば、食欲はなくなるし、つらいよね。胸はもうがん細胞に食べられちゃっているからね…。

[D氏] (乳房を同室患者に見せながら) こっから、ここまで切ってるんだからね。すごく創がきれいでしょ。(中略)となりの奥さんにも『私はこんなに頑張ったんだから、行っといで!』って励ましてあげたわよ。…私も負けてられないね

同室者や看護師にすすんで傷を見せて、自分の創が大きい、しかし、きれいに治った事を堂々と語る。自分が立ち向かっている対象としての乳房喪失を他者に示していた。自分の頑張りを評価すると共に、先駆者として後輩を励ましている姿が語られた。

d) 【新しい属性】：乳房喪失により自分が体験した日常生活の困難や苦痛が他の乳房喪失者にも体験されているのではないかと、自分と他の乳房喪失者を同一視する語りがあった。自分の体験したことを、後輩達に示すことで援助者としての役割も得ていく。

[F氏] △△さんは\*\*とかいう治療始めて効きがいいんだってとか、外来でも病棟でも。いい事も、悪いこともみんな知ったほうが良いと思うの。だから、私は話すようにしている。

[C氏] 私は手術ができたけど、ステージが進んでいるって言うか手術ができない人もいるでしょ。そういう人には、何かをしてあげたいと思う。

e) 【自己を再吟味する対象】：現在や将来のこと、および自分と家族を含む社会との関係を語る文脈に多く現れる。乳房喪失は、共有される新しい属性としてだけでなく、社会との関係を再構築するものであることを意識させる。特に、家族との関係性の拡大が多く語られていた。

[A氏] 乳がんになって、おっぱい一つなくしてしまっただけで、夫と話したりいっしょに歩く時間が増えた気がします。喧嘩をする機会も増えたけど。

[D氏] 私は、腕が麻痺して動かないでしょ。冬は体拭くだけでいいんだけどね、夏はお風呂入りたいでしょ。娘が何かと手伝ってくれるのよ。〇〇さんちの旦那さんとかは、全然病院にも来てくれないみたいだね。

乳房喪失によって生じる家事や通院、世間の目といった重い課題を語る。同時に、家事を分配したり、通院に付き添ってくれたりする家族、何も手伝ってくれず乳房喪失による課題を1人で背負わせる家族、として自分の価値や人生を再吟味する語りが見られた。

#### IV 考察

##### 1 自己像の系譜

カテゴリ a) ~ e) の中に語られた内容を吟味してみると、乳房喪失の意味が複数あるのと同時に、その意味ごとに自己への意味づけが変化していることを読み取ることができた。

- a) では、「癌と診断され、なぜ自分だけが死ななければならぬの？自分よりも悪いことをしている人はいっぱいいるのに…」という被害者の感情を持つ。
- b) では、「今は手術や抗がん剤治療によって苦痛を味わっているけれど、この期間が済めば、ふたたび生き生きと生きられるはず」と、患者として奮闘する。
- c) では、「手術によっての後遺症を克服し、治療の副作用を軽減してやる」と挑戦者・戦士としてガンに立ち向かう。
- d) では、社会的には弱い立場であるが、乳房喪失者であるが故の強みを生かして行こうと、乳房喪失女性として新しい属性を得る。
- e) では、社会的繋がりの中でも、家族内での繋がりや強さ・弱さを再発見する。そのことによって、罹患以前は当たり前感じていた、妻、母親としての社会的役割を再認識する。

このことから、乳房喪失の「意味」が刻々と変化する過程は、乳房喪失を経験した対象者の自己への意味づけ、すなわち自己像の系譜であるとも言える。自己への視角が増え、結果として自己像が多面的に発達していった。複数の役割をもっていることは、悩みや疲労の軽減に役立ち、調和の取れた役割関係を持っている人は社会的に孤立している人よりも、それらの役割から獲得するものが多いとされている。岡本<sup>7)</sup>は「成人期の女性がアイデンティティを発達させるためには、役割葛藤などの「危機」体験が積極的な意味を持っていること、複数の役割をもち、これらに積極的に関与していくことによって、ストレスという否定的な影響だけではなく、相乗作用的発達を遂げる」と述べて

いる。乳房喪失という体験によって、個としての自己、関係性の相互調整という課題と向き合わざるを得ない状況に置かれたために、社会的な自己の役割や位置づけの再確認と自己像の全体的発達が促進されたのではないかと考える。

##### 2 「意味」の広がりや時間の流れのモデル化

人々が発達とともに思春期以降に他者との交わりの中で獲得していく多面的で独立した自己とは異なって、「乳房喪失」という人生の転機を基点とする意味カテゴリーは相互関連しながら発達していくことが明らかになった。語られたライフストーリーの時間軸に沿って a) が終われば b) へ移行、b) が終われば c) へ移行という風に離散的に並んでいるように見える。しかし、各カテゴリーはそれぞれ独立して意味を成しているのではないことが以下の考察から明らかになった。

まず、【一時的苦痛】はその前の【自己の否定的変化】と苦痛・不快というニュアンスは共有しつつも、時間的連続性の違いがある。【自己の否定的変化】は、乳房喪失後どのように長い時間が経過しても語られる要素をもっているが、【一時的苦痛】は、手術や抗がん剤治療に伴うものであり、一時的に「生」は減弱してもまた再開するのである。能智<sup>6)</sup>は失語症者が「失語」に一時的に不快を感じる語りを「一時的苦痛」としてカテゴリー化している。しかし、悪性腫瘍のように術後も化学療法などの治療と副作用の影響を受ける場合には【一時的苦痛】は重要度を増減させながら繰り返し表われていた。【立ち向かう対象】では、【一時的苦痛】と同様に乳房喪失を「対峙するもの」と捉えてはいるが、半永久的に付き合っていかなければならぬものとしての意味が捉えなおされる。【新しい属性】では、乳房喪失を対峙から、折り合いを付け共生する対象へと転化する。【自己を再吟味する対象】は乳房喪失を他人の目から隠す対象から社会や家族に提示すべき対象とし、乳房喪失を通して社会との接点を再認識していく一端が見えた。この関連性は、中途障害者<sup>8)</sup>、術後障害者など人生の途中で社会から新しい視線を意識しなければならない人々の共通体験とも言えるのである。術後長期間が経過した事例では、乳がんの早期発見に働きかけたり、患者会の活動を通して後輩へのアドバイスを行ったりと、その活躍が知られている<sup>2)</sup>。本稿での対象6事例では術後4ヶ月前後であったこと、患者会などが存在しなかったことなど社会との新たな接点は少なかったが、家族内での自己の再確認に繋がっていた。

乳房喪失の「意味」の広がりを横軸、縦軸に時間をとってモデルを構成した(図1)。このように、時間軸に沿って、乳房喪失の意味は重層化しながら経過していくと思われる。その形状から「トランペット型 意味分化モデル」と名付けた。a) 【自己の否定的変化】というカテゴリーが

生成され、その特徴を引き継ぎつつ(カテゴリーの始まりが古いカテゴリーと重なっている)、b)【一時的苦痛】というカテゴリーが周縁に生成される。時間を経過して、c)、d)、e)と新しい意味が特徴を引き継ぎつつ周縁に生成されていくが、古いカテゴリーは重要度を減弱しながら奥底に定置される。ある時点でのカテゴリーは横断面を見ることによって、重層的な「意味」や「自己像」をみることが出来る。中心にa)【自己の否定的変化】を位置させたが、時間の経過と共に相対的に【自己の否定的変化】の意味は奥底に追いやられるが、乳房喪失者の誰もが奥底には【自己の否定的変化】の意味を抱えているということであり、中心的意味を為しているということではない。また、ある時点では真新しい意味が心の奥底にあるため横断面の中心にあるが、時間の経過に伴い重要度は優勢になって行くのである。竹田<sup>9)</sup>によれば、ある事物に「意味がある」ということは、生の欲望の表現であり、人が経験を積み積むほどその事物と人の欲望の関連は複雑さを増していく。乳房喪失体験者も、乳房喪失を他者との交流や経験を通して、社会と自分をつなぐ媒介という意味へと発展させていったのである。

V 結論

乳がんによって乳房喪失を経験せざるをえなかった女性6名のライフストーリーを分析した結果、「乳房喪失」を【自己の否定的変化】【一時的苦痛】【立ち向かう対象】【新しい属性】【自己を再吟味する対象】として意味づけていた。「意味」の広がりや時間の流れのモデル化を通して、これ

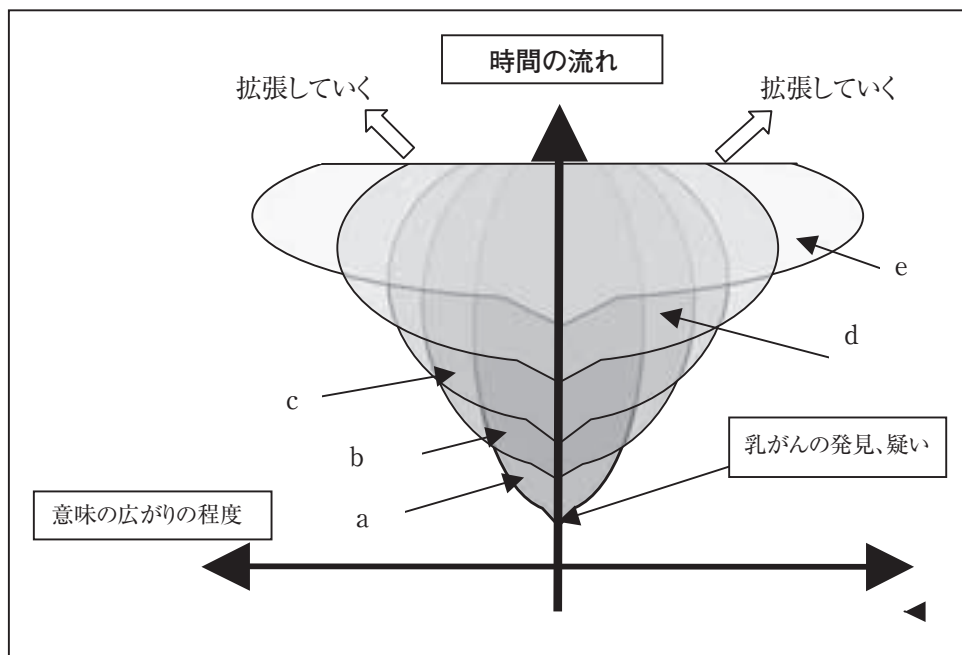
らの「意味」は直線的・段階的に変化するのでなく重層的構造をしていることが明らかになった。この結果は、これまでの直線型、段階型の危機回避モデルに対するアンチテーゼの役割を十分果たせるものである。予後が比較的良好で長い療養生活を特徴とする乳がん患者の経験を理解することの質の向上に、寄与するものと考えられる。

VI 研究の限界と今後の課題

研究の限界として、6事例を対象とした質的研究であるということから、抽出された「意味」「自己像」、そして現実を構造化した「モデル」が、乳房喪失者すべてに適用できるものではない。今後の課題としては、健康レベルの経過の異なる乳房喪失者らのライフストーリーと照らし合わせながら、本研究では十分吟味できなかった部分を検討していきたい。社会との相互作用という面では、社会が提供するサービスが、乳がん術後患者の生活にどのような位置を占め、ライフストーリーとしてどのように表現されるのか。本研究で対象の術後期間が最長4ヶ月と短期であったことから、今後は術後経過が長く、患者会やセルフヘルプグループに参加する乳がん術後患者のライフストーリーにも焦点をあてていきたいと考える。

注

本研究の一部は、第11回日本看護診断学会学術大会(横浜)において発表した。本研究は平成18年度文部科学省科学研究費補助金(若手(B))(課題番号:18791679, 研究代表者:内田伸樹)、平成18年度新潟医療福祉大学外部



(図1 トランペット型意味分化モデル)

資金獲得奨励金を受け、その一部を使用し実施したものである。

#### 文献

- 1) 松木光子, 越村利恵, 大谷英子ら: 乳癌手術患者の心理的適応に関する縦断的研究(1)—術前から術後3年にわたる心理反応, 日本看護研究学会雑誌, 15 (3), 20-28, 1992.
- 2) 松木光子, 越村利恵, 大谷英子ほか: 乳癌手術患者の心理的適応に関する縦断的研究(2)—ソーシャルサポートネットワークを中心に, 日本看護研究学会雑誌, 15 (3), 29-38, 1992.
- 3) やまだようこ: 人生を物語ることの意味, 人生を物語る: 生成のライフストーリー, pp 1-38, ミネルヴァ出版, 2000.
- 4) McAdams, D. P: The stories we lived by: personal myths and the making of the self. Guilford Press, 1993.
- 5) 水野節夫: 事例分析への挑戦—‘個人’現象への事例媒介的アプローチの試み, 東信堂, 2000.
- 6) 能智正博: 「適応的」とされる失語症者の構築する失語の意味—その語りに見られる重層的構造, 質的心理学研究, 2, 89-107, 2003.
- 7) 岡本祐子: アイデンティティ生涯発達論の射程, 175, ミネルヴァ出版, 2002.
- 8) 田垣正晋: 生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味, 質的心理学研究, 1, 36-54, 2002.
- 9) 竹田青嗣: 意味とエロス: 欲望の現象学, 筑摩書房, 1993.
- 10) 内田伸樹: 乳房喪失者の乳がん患者が生きる意味を探求していく過程のライフストーリー, 放送大学大学院修士論文, 2007